

の事は後生菩提疑なし。何事よりも文永八年の御勘氣の時、既に相摸國龍口にて頸切れんとせし時にも、殿は馬の口に付て足歩赤足にて泣悲み給事、實にならば腹きらんとの氣色なりしをば、いつの世にか思忘るべき。そのみならず、佐渡の島に放たれ、北海の雪の下に埋れ、北山の嶺の山下風に、命助かるべしともをぼへず。年來の同朋にも捨られ、故郷へ歸らん事は、大海の底のちびきの石の思ひして、さすがに凡夫なれば古郷の人々も戀しきに、在俗の宮仕隙なき身に、此經を信ずる事こそ希有なるに、山河を陵き、蒼海を経て遙に尋來給志、香城に骨を碎き、雪嶺に身を投し人々にも争か劣り給べき。又、我身はこれ程に浮び難かりしが、いかなりける事にてや、同十一年の春の比、赦免せられて鎌倉に歸り上りけむ。情事の情を案ずるに、今是我身に過あらじ。或は命に及ばんとし、弘長には伊豆國、文永には佐渡の島、諫曉再三に及べば留難重疊せり。佛法中怨の誠責をも身にははや免れぬらん。然るに今山林に世を遁れ、道を進んと思しに、人々の語様々なりしかども、旁存ずる旨ありしに依て、當國當山に入て已に七年の春秋を送る。又、身の智分をば且く置ぬ。法華經の方人として難を忍び、疵を蒙る事は漢土の天台大師にも越、日域の傳教大師

①〔時〕一〇 ②『佐渡...戀し』88字参照 ③海=國 ④〔郷〕一〇 ⑤きに=かるへかりしに
 ⑥ ⑦給=られし ⑧碎=折き ⑨『弘長...を送る』107字参照 ⑩〔誠〕一〇 ⑪をも身
 には=我 ⑫〔らん〕一〇